

令和３年度第２回秋田県立美術館運営協議会（書面開催）要旨

１ 書面開催について

書面開催の方法は、報告・協議事項について、協議会委員から意見を徴収し、集約したものに、秋田県立美術館指定管理者（公益財団法人平野政吉美術財団）の回答及び考えを付して会議録とする。

２ 書面提出委員

山崎 宗雄
長瀬 達也
加藤 隆子
藤田 亜樹子
ジョージ・ジャービス

３ 報告・協議事項及び意見を求める項目

（１）報告事項

- ① 令和３年度秋田県立美術館の事業概要について
- ② 秋田県立美術館月別入館者数（令和元年度～３年度）
- ③ 展覧会別入館者数（令和元年度～３年度）
- ④ 秋田県立美術館県民ギャラリー入場者数（令和元年度～３年度）
- ⑤ 秋田県立美術館セカンドスクールの利用数（令和元年度～３年度）

（２）協議事項及び意見を求める項目

- ① 令和３年度秋田県立美術館の事業について
 - ・ 展覧会事業（特別展・企画展等）について
 - ・ 教育普及事業（セカンドスクール、各種教室等）について
- ② ミュージアム活性化事業３カ年計画について

（３）その他

４ 委員からの御意見・御提言等並びに秋田県立美術館指定管理者の回答

① 令和３年度秋田県立美術館の事業について ・ 展覧会事業（特別展・企画展等）について	
委員からの御意見・御提言等	指定管理者の回答
○「ミニチュア・ライフ展」の入場者が２万人を超えたのは、SNSでの拡散が、若い層に大きく影響したものと推察できる。著作権を守りながらどうPRするか、「ミニチュア・ライフ展」の成功を参考にしたい。個人的には企画展「藤田嗣治 秋田で見た建築と風景」が面白かった。	●「ミニチュア・ライフ展」は、作家の許諾があり作品の撮影ができたため、SNSとの親和性が高かった。そのため家族連れや若い来場者も多かったと思う。著作権に配慮しなければならない展覧会では全く同じ方法は取れないが、HPやSNS等での情報発信も工夫してまいりたい。
○令和３年度のミュージアム活性化事業は、目指しているところが実行されていると感じる。	●今後も様々な優品を紹介できるよう展覧会企画の充実に努めてまいりたい。
○「ルーヴル美術館の銅版画展」「木村伊兵衛回顧展」素晴らしい企画だった。	

○いろいろな困難や意見があると思うが、県立美術館の展覧会事業（特別展・企画展等）には、前向きな話題性や生涯学習上の価値がある。県民へ確実に、美術表現には様々なジャンルや表現傾向などがあることを理解させ、美術鑑賞の楽しさを浸透させている。今後も、現在の姿勢を一層堅持して欲しい。	●展覧会事業の成果を一層深化させるため、展覧会に付随した各種の事業（講演会、ワークショップ等）にも力を入れている。様々な角度から、美術鑑賞や創造の楽しさを発信してまいりたい。
○このコロナ禍において、最小限の職員数でこれだけの事業を積極的に執り行っている姿勢は素晴らしい。展覧会の内容も、特別展・企画展と、年度計画の中でバランス良く組まれていると思う。各展覧会に付随して行われている講演会やワークショップについては、ユニークで展示内容に興味を持たせるものが多く、着眼点にいつも感心している。今年度も、専門家による講演会のみならず、落語家やアナウンサーなど、異業界の方と連携するなど、意欲的な事業が多かったと思う。	
① 令和３年度秋田県立美術館の事業について ・ 教育普及事業（セカンドスクール、各種教室等）について	
○秋田公立美術大学の教授陣とのコラボレーションを考えられないか。	●令和３年度の特別展関連事業であるワークショップの講師として、公立美術大学の先生にお越しいただいた。今後も、内容に応じて連携していければと考えている。
○パスタマシン使用の版画講座、メキシコのくす玉、三吉節披露など、内容盛りだくさんと拝見した。「シェア・ギャラリー」は、通常、個々に活動している作り手が集い行う展示で、その多様な手法や作品を一堂に観ることができ、楽しい展示だった。	●今後も教育普及活動の充実に努めてまいりたい。
○新型コロナウイルスへの対応が不可欠な状況にも関わらず、セカンドスクールの利用者が前年度より増加したことは、特に高く評価できる。《秋田の行事》の壮大なスケールや、作者・藤田嗣治が発揮した構成力及び表現力の素晴らしさは、鑑賞した児童・生徒・学生の心に必ず残るので、今後も取組に努力して欲しい。なお、徒歩で来場できる学校等に対しては、積極的に鑑賞学習を実践する教育的価値をアピールしてもらいたい。	●今年度は、各学校において、コロナ前は県外を訪問先としていた遠足・修学旅行などを県内に変更する動きが多かった。初めて県立美術館を訪れ《秋田の行事》を鑑賞したという児童・生徒も少なくなかったようである。これを機に、ふるさと秋田の文化や芸術に対する興味や関心を高めてもらえるよう取り組みたいと考えている。
○コロナの影響により、セカンドスクールなどで県内の利用が増えているのは、美術館・資料館共通の動きといえる。これを子どもたちが、ふるさと秋田の文化や芸術に触れる良い機会としてくれることを期待する。	●セカンドスクールの利用は学校が対象であるが、毎月第２土曜日には、定例の《秋田の行事》ギャラリートークを行っている。こうした教育普及活動のPRも一層進めてまいりたい。

○コロナ禍であっても、セカンドスクールの利用者数が増えていることはとても良かった。若いうちに美術館に行く習慣は、将来の美術鑑賞の基になると感じている。	
○今後も「出前授業」の取組を継続して欲しい。美術館に訪れるのが難しい生徒も、藤田嗣治の《秋田の行事》に触れることができる。	●変動するコロナの蔓延状況を注視しながら、希望があれば可能な限り対応したいと考えている。
② ミュージアム活性化事業3カ年計画について	
○報道機関各社のアニバーサリー等とうまく連携し、お互いの利益になるよう努力してもらいたい。	●県内メディアとの実行委員会方式により、広報効果は確実にあがっている。連携しながら、より多くの方々に展覧会の魅力をお伝えしたいと考えている。
○「県民ニーズ」の把握や分析は、一層急務と考えられる。県民が好む美術の表現傾向には、一定の特徴があると考えられる。このことに企画段階で留意することは、今後も必要ではないか。他都道府県からの観光客や美術評論家などから、県立美術館及び藤田作品は、高く評価されていると思う。これを県民に効果的に宣伝して欲しい。	●特別展、企画展ともに展覧会のアンケートを実施し、集計している。常設展示している藤田作品を中心とした平野コレクションについては、確かに県外や海外からの評価が特に高いと感じている。県民にも、より工夫を重ねてPRしていくとともに、県民ニーズを踏まえた特別展の開催もバランス良く行ってまいりたい。
○様々な企画があり、楽しみである。藤田嗣治の財産も定期的に発信されていて、いつでも目にすることができる安心感がある。	
○展覧会事業は準備に多くの時間を費やし、かつ中身も充実させていかなければならないので、3カ年計画として先を見据えて事業を行っていくことは必須である。しかし、評価表の「テーマ」や「実施のねらい」の文言の持つ意味がよく分からない。個人的には、そもそも必要なのか疑問である。年度の中の各展覧会、それぞれに持つ内容は深いものがあると思う。それを一つの文言、テーマにすると、あまりに抽象的で飾り的なものになってしまい、無意味な気がする。	●ミュージアム活性化事業の「評価表」については、本事業により特別展を開催している県立美術館、県立博物館、県立近代美術館の3館で共通の様式となっており、今年度から各館の運営協議会委員に評価をお願いしたものである。様式のあり方については、委員の皆様や各館の意見を集約しながら、生涯学習課の方で検討してまいりたい。
○「透明標本展」にどのようなものが出るか楽しみである。 「川瀬巴水展」では、新版画、創作版画、浮世絵版画の区別をしてもらいたい。 「岸田劉生展」は、前に東京ステーションギャラリーで開催されたものか。 「藤田嗣治 子どもへのまなざし」も楽しみである。 「北斎漫画」は世界中に大きな影響を与えたもので、本来は人が手に取って観る者だったが、それが美術館でどのように展示され	●令和4年度以降の特別展について、展示内容など大枠は決まっているが、細かな調整を続けている。テーマを掘り下げ、内容を深めながら、皆様に喜んでいただけるよう努めたい。 ●川瀬巴水の作品は新版画である。 ●岸田劉生展については日動画廊の企画である。

るか楽しみである。	
③ その他	
○SNSでの情報発信に、もう少し力を入れてもいいのではないかと思います。直言するなら、写真が下手すぎる。もう少し勉強してもらいたい。	●美術館から発信する画像の撮影技術については、専門とする方々からのご指導を賜りながら向上させてまいりたい。
○県民には、美術表現などについて、もっと親しみたいという意識が内在していると思われる。よって、講師を県内からより多く発掘し、活用して、美術館教室などをより活発にしてもらいたい。なお、ボランティア的に協力してもらえるのであれば、より良いと思われる。限られた予算で事業等を行っていくことは、より困難が多くなっていくと考えられる。しかし、県立美術館の責務として、今後も県民及び秋田県の文化のために活躍してもらえれば幸いである。	●今後も、多方面からの御協力をいただきながら事業の充実を図ってまいりたい。
○PRや予算的な問題から、実行委員会形式の展覧会が多いが、入館者数、観覧料収入のみにとらわれることなく、美術館としての使命と機能を今後も維持できるよう、運営に取り組んでいていただきたいと思う。	●県立美術館の基本方針である「平野コレクションの藤田嗣治作品による文化の創造」はもとより、芸術文化ゾーンの中核施設として、幅広い層の県民に親しまれ、愛される美術館を目指していきたいと考えている。
○本当はじっくりと一つひとつの展覧会を観たいが、小さな子どもがいるためなかなか行けない。託児までは無理でも、塗り絵コーナー、名画パズル、遊具などで遊べる空間があると、小さな子どもが訪れやすくなり、より幅広い世代の県民が訪れやすくなるかもしれない。	●子どもたちの情操教育に美術館が果たすべき役割は重要である。スペース的な制限があり、できることは限られるが、子どもたちが気軽に参加できる教育普及活動にも力を入れてまいりたい。
○もっと積極的に県立美術館の存在をインターネット上に載せる方法はないか。例えば、美術館の活動について、毎月、電子メール通信などを出すことはできると思う。	●現在は、Facebook や Twitter を活用している。これらのインプレッションなどを参考にして、効果的なPR方法を検討してまいりたい。

5 総括

令和元年度末から続く、新型コロナウイルスの影響により、目標としている年間入館者数12万人には届かなかったものの、安全・安心を最優先として、できることに一つひとつ取り組んでまいりました。社会状況は様々に変化し続けておりますが、そんな中でも県民の皆様に普遍的価値基準の作品や、知ってほしい作品等を今後も紹介していきたいと思っております。